

同志社の学生と教育の傍ら目

坂野 誠

「同やん、立ちゃん、学生さん」この言葉を使う人は、今ほとんどいないのではないだろうか。かつて、京都の三大学の学生をこう呼んだ。同志社大学・立命館大学・京都大学の学生である。同志社大学の学生は「同やん」と親しみを込めて呼ばれた。親しみを込めても立命館大学の学生とはやや趣を異にする。「やん」と「ちゃん」の違いは、「やん」のほうがやや大人びた感じを受ける。勉強一筋の堅物「学生さん」とは違う、柔らかい感性を持った育ちのいいぼんぼんというイメージがあった。現在の学生はどうであろうか。当時と同様な高校生が入学してきているのか。また、その学生がどのような卒業後の進路を選択しているのか。この報告は、社会学部教育G P評価委員会が行った卒業生アンケートから、現在の同志社大学の学生像を描き出し大学の提供する教育を考えるものである。卒業生アンケートは、「卒業生から大学への『成績表』として、同志社大学での教育と学生生活を評価してもらい、後輩への教育を改善するために役立てる」意図で行っているが、そこから見えてくる学生像は同志社大学の将来像を左右するものと考えられる。大学の入学時(インプット)、大学での授業(スループット)、卒業後の進路(アウトプット)として各時点での学生の姿を追ってみる。使用したデータは2009年・2010年・2011年調査を3カ年分合併したものをを使用した。

インプット

入試の種類によって入学生を分類したものが表1である。推薦入試・AO入試の拡大が話題になるが、文部科学省「平成22年度国公立大学入学者選抜実施状況」によると、私立大学で、一般入試は48.1% 推薦入試は40.9% AO入試は10.5%である。同志社大学の社会学部では、一般入試・センター利用入試で入学してくる学生の割合が多いことがわかる。

表1 入試の種類別人数割合1

入試の種類	人数	%
一般入試・センター利用入試	763	66.9%
推薦入試・AO入試	112	9.8%
内部校推薦	225	19.7%
その他	41	3.6%
合計	1145	100.0%

表2 入試の種類別 高3時の成績×18歳当時の家の経済状況

入試の種類	高3時の成績	18歳当時の家の経済状態						相関係数
		豊か	やや豊か	ふつう	やや貧しい	貧しい	合計	
一般入試・センター利用入試	上のほう	2.1%	7.3%	11.1%	3.2%	0.8%	24.4%	$\gamma = 0.064$
	中の上	2.5%	10.2%	12.3%	2.6%	0.4%	28.0%	
	中ぐらい	0.4%	6.3%	11.5%	2.6%	0.3%	21.1%	
	中の下	1.3%	2.2%	5.8%	1.3%	0.7%	11.3%	
	下のほう	0.7%	4.9%	7.4%	1.3%	0.9%	15.2%	
	合計	7.0%	30.9%	48.0%	11.1%	3.0%	100.0%	
推薦入試・AO入試	上のほう	0.9%	3.6%	13.4%	2.7%	0.0%	20.5%	$\gamma = -0.043$
	中の上	0.9%	10.7%	10.7%	1.8%	1.8%	25.9%	
	中ぐらい	0.9%	7.1%	17.0%	1.8%	1.8%	28.6%	
	中の下	0.9%	1.8%	7.1%	0.0%	0.0%	9.8%	
	下のほう	2.7%	2.7%	7.1%	0.9%	1.8%	15.2%	
	合計	6.3%	25.9%	55.4%	7.1%	5.4%	100.0%	
内部校推薦	上のほう	3.6%	11.2%	6.3%	0.4%	0.0%	21.4%	$\gamma = 0.150$ *
	中の上	4.0%	9.8%	8.9%	1.3%	0.0%	24.1%	
	中ぐらい	3.1%	12.9%	15.6%	1.3%	0.0%	33.0%	
	中の下	1.8%	5.8%	1.8%	1.8%	0.4%	11.6%	
	下のほう	2.2%	1.8%	4.5%	0.4%	0.9%	9.8%	
	合計	14.7%	41.5%	37.1%	5.4%	1.3%	100.0%	
その他	上のほう	2.6%	10.5%	5.3%	0.0%	0.0%	18.4%	$\gamma = 0.444$ **
	中の上	5.3%	2.6%	18.4%	0.0%	2.6%	28.9%	
	中ぐらい	0.0%	5.3%	15.8%	2.6%	0.0%	23.7%	
	中の下	2.6%	2.6%	10.5%	5.3%	0.0%	21.1%	
	下のほう	0.0%	0.0%	5.3%	2.6%	0.0%	7.9%	
	合計	10.5%	21.1%	55.3%	10.5%	2.6%	100.0%	
合計	上のほう	2.3%	7.8%	10.2%	2.5%	0.5%	23.2%	$\gamma = 0.085$ **
	中の上	2.7%	9.9%	11.7%	2.2%	0.5%	27.0%	
	中ぐらい	1.0%	7.7%	13.0%	2.3%	0.4%	24.3%	
	中の下	1.4%	2.9%	5.3%	1.4%	0.5%	11.6%	
	下のほう	1.1%	3.9%	6.7%	1.1%	1.0%	13.9%	
	合計	8.6%	32.2%	46.8%	9.5%	2.9%	100.0%	

* $P < .1$

** $P < .05$

高3時の成績は、推薦・AO入試と内部校推薦で入学した学生は、「中ぐらい」が最も多いが、それ以外の入試形態では「中の上」が最も多い。一般入試・センター利用入試では「上のほう」「中の上」を合計すると50%を超える。これからすると、確かに一般入試・センター利用入試で入学してきた学生のほうが、高校時代の成績はよいようである。しかしながら、「中ぐらい」と「中の上」「上のほう」の成績は客観的な指標ではなくあくまで学生の主観であるので単純比較はできない。まして一般入試・センター利用入試と内部校推薦入試とでは確実に高等学校が違うわけであるからそこでの成績を学力として比較することはできない。ただ、学生たちの所属した高校での各自の相対的位置はある程度正確には表していると思われる。その意味からすると、各高校では相対的に成績の良かった生徒たちが入学してきていることは事実であろう。推薦入試・AO入試の拡大が問題になるのは、いわゆる学力試験を受けずに入学する学生の学力低下である。岡部らが「分数ができない大学生」で告発した大学生の学力低下現象は、アラカルト入試を可能にしたセンターテストや面接だけのAO入試など大学の入試制度の多様化によってさらに加速した可能性がある。同志社大学に限っていえば推薦・AO入試の割合は内部推薦を含めても全国平均を下回っており、高校時代の成績は学生の自己評価でも相対的に高いようであるので、学力低下は生じていないように思えるが、実際に授業を担当されておられる先生方の意見はどうであろう。

かつての同志社大学生は育ちのいいぼんぼんのイメージを持っていた。今の学生はどうであろうか。高3時の成績と18歳当時の家の経済状態のクロス表を、入試の種類で層別化したものが表2である。学生の自己判断ではあるが、全体において家の経済状態は「ふつう」と答えたものの割合が最も多い。「豊か」「やや豊か」の合計も40%を超えており、「ふつう」以上の生徒が88%近くを占める。入試の種類別に見ると、内部校推薦で合格した学生では、「豊か」「やや豊か」を合計した割合が50%を超える。どの入試の種類を取っても「ふつう」以上の生徒の割合は80%を超えており、内部校推薦では90%以上の高率となっている。あくまで生徒の自己評価ではあるが同志社大学の入学生は、相対的に豊かな家庭の出身者だと思われる。その意味でぼんぼんである資格はある。

一方大学への進学率が50%を超える今、高校生の学力が親の経済状態に影響を受けることがいわれる今、大学進学を考える高校生の家の経済状態は「ふつう」以上と考えることも可能だが、そこまで親の経済状態が高校生の大学進学にとって支配的かどうかはわからない。そこで高3時の成績と18歳当時の家の経済状態の順序相関 γ を取ってみると、全体では、5%有意であり、値としては小さいが高3時の成績と18歳当時の家の経済状態に相関がありそうである。しかし、入試の種類別に見ると、値が最も高いのは、入試の種類がその他で入学してきた学生で、その次に内部校推薦である。一般入試・センター利用入試ならびに推薦・AO入試では有意な相関は観られなかった。内部校推薦で入学してきた学生は、入学時に於いてまあまあ豊かな生活で成績も良かった高校生が入学してきていると言える。育ちのいいぼんぼんであることに違いなさそうである。ただ学生全体がそうで

あるかはこの相関では断定できないと思われる。

アウトプット

アウトプットとスループットの分析をするに当たり、入試の種類でその他を除く。その他には、他大学からの編入が含まれる可能性があり、高等学校から同志社大学へのトランジションにおいて、できるだけ他大学の影響を除きたい。もっとも浪人は排除できないので、その中に他大学からの再受験は含まれてしまう。

表3 入試の種類別人数割合 2

入試の種類	度数	%
一般入試・センター利用入試	763	69.4%
推薦入試・AO入試	112	10.2%
内部校推薦	225	20.5%
合計	1100	100.0%

アウトプットの分析として、東証一部上場企業への就職を取り上げる。受験生向けの進学雑誌「卓越する大学」では巻末に、50大学×273企業の就職クロスデータが掲載されている。ダイヤモンド、プレジデント等の週刊誌にも、大学別に大企業への就職数を掲載する記事が見られる。大企業への就職が、大学の目的ではないが、大学の評価の尺度として使われることも事実である。「卓越する大学」では、受験生の志望校選定の重要項目として、就職状況が第5位にあげられ複数回答で55.7%の高校生が支持している。(ちなみに1位は偏差値で83.7%、大学の知名度70.9%、学部・学科・研究内容61.3%、入試科目60.5%と続く。第6位は取得できる資格48.3%)大企業への就職は受験生にとっても、大学を選択する上で重要な要件である。そしてもちろん、社会が大学を評価する際にも重要な要件でもある。この質問項目は欠損値が多くなる(有効回答数66.2%)が、回答者の割合は入試の種類について、ほぼ7対1対2であり、全体の割合と変わらない。回答者の51%が東証一部上場企業に就職している。

表4 入試の種類×東証一部上場企業就職

入試の種類	東証一部企業		N
	あてはまらない	あてはまる	
一般入試・センター利用入試	52%	48%	514
推薦入試・AO入試	40%	60%	67
内部校推薦	46%	54%	147
全体	49%	51%	728

有効回答数が 66.2%であるから、回答者以外は東証一部上場企業に就職しないとしても全体の約 30%強が、東証一部上場企業に就職していることになる。結構がんばっている印象を受ける。入試の種類で分類すると、推薦・AO 入試と内部校推薦で合格してきた学生では 50%を超えている。カイ二乗検定では有意ではないので、入試の種類によって東証一部上場企業就職に有意な差があるとは言えない。高 3 時の成績とのクロス表から、東証一部上場企業就職者の割合は「下のほう」と回答した層が最も高く 61% であり、その次に「中の上」の 52% である。18 歳当時の家の経済状態とのクロス表では、「やや豊か」答えた層が 58% で最も高く、その次が「豊か」で 55% である。高校時の成績と家の経済状態とは異なる動きを示している。

アウトプットの変数として東証一部上場企業就職を取り上げたが、インプットでの要因とのクロス表を分析しただけでは、同志社大学教育の中身の影響が見えてこない。大学 4 年間で学生たちはどのような変化を遂げるのか、大学教育の効果をスループットとして取り上げる・

スループット

スループットの効果をみるために、「大学に入学した時点と比べてとき、次にあげる知識や技能は、授業を通してどのくらい向上したと思いますか」の質問項目を取り上げる。質問項目は全部で 8 つある。

「自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」これを簡潔に「説明能力」とした。

「根拠を示し簡潔に書く能力」これを簡潔に「文書能力」とした。

「1 つの物事を複数の視点から考える能力」これを簡潔に「複眼視点能力」とした。

「文献や資料を読み解く能力」これを簡潔に「読解能力」とした。

「必要な文献や統計資料を探すスキル」これを簡潔に「文献探査能力」とした。

「数量的に分析する能力」これを「量的分析能力」とした。

「外国語のスキル」これを「言語能力」とした。

「異文化に関する理解」これを「異文化理解能力」とした。

回答は 4 件法で、「向上した」を 1、「どちらかといえば向上した」を 2、「変わらない」を 3、「低下した」を 4 と回答するようになっているが、数値を逆転したものをを用いる。その平均値と標準偏差を東証一部上場企業の就職とクロス表にしたものが表 5 であり。入試の種類とクロス表にしたものが表 6 である。これら 8 つの能力の中で「量的分析能力」と「言語能力」では、「変わらない」と回答したものが一番多く「向上した」と「どちらかといえば向上した」をあわせても 50% を超えない。他の能力では、「どちらかといえば向上した」が最も多い回答となっておりほとんどが 50% を超える。そして「向上した」とあわせるとほとんどが 70% を超えている。大学の教育によって能力が向上した実感をかなり持っているようである。能力の向上と東証一部上場企業就職とのクロス表が表 5 である。

表 5 授業で向上した力×東証一部上場企業就職

授業で向上した力		東証一部上場企業		分散分析	N
		あてはまらない	あてはまる		
説明能力	平均値	3.12	3.23	$F(1)=5.617$ $p<.05$	719
	標準偏差	.689	.613		
文書能力	平均値	3.18	3.23	$F(1)=1.264$ $n.s.$	719
	標準偏差	.624	.653		
複眼視点能力	平均値	3.33	3.24	$F(1)=3.712$ $p<.1$	717
	標準偏差	.631	.632		
読解能力	平均値	3.15	3.18	$F(1)=.381$ $n.s.$	717
	標準偏差	.626	.650		
文献探査能力	平均値	3.16	3.13	$F(1)=.312$ $n.s.$	718
	標準偏差	.662	.676		
量的分析能力	平均値	2.48	2.51	$F(1)=.208$ $n.s.$	719
	標準偏差	.771	.784		
言語能力	平均値	2.33	2.31	$F(1)=.082$ $n.s.$	718
	標準偏差	.931	.941		
異文化理解能力	平均値	3.02	2.95	$F(1)=1.519$ $n.s.$	719
	標準偏差	.764	.799		

表 5 より、東証一部上場企業に就職した学生のほうが平均値が高くなっているのは、説明能力・文書能力・読解力・量的探査能力の 4 つである。東証一部上場企業に就職するかどうかで、平均値に有意に差があるといえるのは、説明能力と複眼視点能力の 2 つである。説明能力は東証一部上場企業就職者のほうが高く、逆に複眼視点能力は東証一部上場企業就職者のほうが低いことが分かる。

表6 授業で向上した力×入試の種類

授業で向上した力	入試の種類	平均値	標準偏差	分散分析	N
説明能力	一般入試・センター利用入試	3.11	.669	$F(2)=2.841$ $p<.1$	1071
	推薦入試・AO入試	3.24	.651		
	内部校推薦	3.20	.730		
	合計	3.14	.681		
文書能力	一般入試・センター利用入試	3.15	.653	$F(2)=3.152$ $p<.05$	1069
	推薦入試・AO入試	3.25	.626		
	内部校推薦	3.26	.659		
	合計	3.18	.652		
複眼視点能力	一般入試・センター利用入試	3.27	.639	$F(2)=1.059$ $n.s.$	1068
	推薦入試・AO入試	3.37	.635		
	内部校推薦	3.30	.675		
	合計	3.29	.646		
読解能力	一般入試・センター利用入試	3.15	.654	$F(2)=5.087$ $p<.01$	1069
	推薦入試・AO入試	3.36	.570		
	内部校推薦	3.14	.698		
	合計	3.17	.657		
文献探査能力	一般入試・センター利用入試	3.15	.676	$F(2)=2.178$ $n.s.$	1068
	推薦入試・AO入試	3.27	.664		
	内部校推薦	3.10	.735		
	合計	3.15	.688		
量的分析能力	一般入試・センター利用入試	2.49	.784	$F(2)=3.198$ $p<.05$	1071
	推薦入試・AO入試	2.68	.792		
	内部校推薦	2.46	.748		
	合計	2.51	.779		
言語能力	一般入試・センター利用入試	2.25	.950	$F(2)=5.683$ $p<.01$	1070
	推薦入試・AO入試	2.49	.846		
	内部校推薦	2.43	.876		
	合計	2.31	.929		
異文化理解能力	一般入試・センター利用入試	3.02	.767	$F(2)=0.998$ $n.s.$	1070
	推薦入試・AO入試	3.08	.795		
	内部校推薦	2.96	.818		
	合計	3.01	.781		

表 6 より、入試の種類別でみると、一般入試・センター利用入試で入学してきた学生の平均値が、他の入試で入学してきた学生より高い能力は一つもない。それとは対照的に推薦・AO 入試で合格してきた学生は、文書能力以外のすべての能力において一番高い平均値を示している。平均値に有意な差が認められるのは、説明能力・文書能力・読解能力・量的分析能力・言語能力である。文書能力以外はすべて推薦・AO 入試で合格した学生の平均値が高い。推薦・AO 入試で合格してきた学生がもっとも能力向上に実感があるようである。

アウトプットに対するインプット、スループットの影響

これまでの分析では以上のようなことが分かった。インプットとして高 3 時の成績、18 歳当時の家の家庭状況、そして入試の種類を 3 つをとりあげた。スループットとしては、授業で向上した能力 8 つをとりあげた。それぞれ入試の種類によってどのような変化があるかを観た。内部校推薦で入学した学生は、18 歳当時の家の経済状態が相対的に豊かであった学生が多く、また推薦・AO 入試で入学した学生は授業によって能力が向上したと考える学生が多い。そして推薦・AO 入試で入学した学生は、他の入試によって入学した生徒に比べ、一部東証上場企業に就職する割合が高い。

これらのインプット・スループットがアウトプットにどのような影響を当てているか、アウトプットの規定要因を探ってみた。東証一部上場企業への就職を従属変数として二項ロジスティック回帰分析をした。独立変数として、「高 3 時の成績」「18 歳当時の家の経済状態」「一般入試・センター利用入試ダミー」「内部校推薦入試ダミー」「説明能力」「文書能力」「複眼視点能力」「読解能力」「文献探査能力」「量的分析能力」「言語能力」「異文化理解能力」を投入した。wald による変数増加法でステップワイズ分析をした結果が表 7 である。

表 7 東証一部上場企業就職回帰分析

独立変数	B	有意確率	Exp(B)
高 3 時の成績	-.141	.015	.868
18 歳当時の家の経済状態	.339	.000	1.404
説明能力	.488	.000	1.630
複眼視点能力	-.479	.001	.619
定数	-.611	.270	.543
N	711		
カイ 2 乗	$p < .001$		
-2 対数尤度	950.21		
Nagelkerke R2 乗	0.0647		

非常におおざっぱな分析であるが、興味深い結果得られた。他の要因をコントロールしても東証一部上場企業に就職するには、説明能力が向上することと 18 歳当時の家の経済状態が正の方向で効果があるということである。説明能力の向上は大企業にとってありがたい能力なのであろう。これはよく言われるコミュニケーション能力と言い換えると企業の要求する能力と整合的である。一方で複眼視点能力の向上が負の値になることは、この能力を必ずしも大企業が評価していないのかも知れない。採用人事は個人的要素が強いので断定的なことはいえないが、日本の大企業が学生に求めている能力の一端を垣間見る気がする。それより、東証一部上場企業の就職に 18 歳当時の家の経済状態が正の方向で効果があるのは意味深い。ブルデュー&バスロンの「遺産相続者たち」を思い出させる。一方、高 3 時の成績が負の効果を持つことは、大学にとっては高校時代成績の良くなかった学生を成長させた証しかも知れないし、学生が大学時代に奮発してがんばったのかも知れない。いずれにしても大学にとって望ましくないとは捉えなくてよいと思われる。しかし入学時の家の経済状態が卒業時の就職に影響することはどう捉えたらよいのだろうか。家の経済状態は、大学の教育とは関係のない個人的属性である。入学時の個人的属性が卒業時の就職に影響する。もちろん東証一部上場企業就職に対しては、入学時の家の経済状態より大学での説明能力向上のほうがオッズ比から見ると高いのであるが、他の要因をコントロールしても入学時の家の経済状態が有意な要因となることは、大学にとって望ましいことなのだろうか。大学の目標が大企業への就職にあれば、経済状態のよい高校生を入学させることが目標を達成するには効果があるとも読めてしまう。そうすると高 3 時に家の経済状態が「豊か」「やや豊か」の割合が多かったのは内部校推薦であるからこの入試枠を拡大すればよいことになる。しかしダミー変数として投入した内部校推薦は有意にはなっていない。高 3 時の成績のマイナス効果とあわせると、前提に立ち戻って、同志社に入学していた学生であることを考慮する必要がある。同志社の学生で、東証一部上場企業への就職の規定要因として 18 歳当時の家の経済状態が正の効果をもたらすということである。大企業の社員であることが、必ず豊かな暮らしに結びつくわけではないが、経済的に安定した生活は保障してくれる。その意味からすると、この結果は大学が再生産の装置として機能していることを示しているように思われる。

同志社大学では、新島襄曰く「一国を維持するは、決して二、三英雄の力に非ず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず。是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり。而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す。吾人が目的とする所実に斯くの如し」。当時の官製の大学が担った国家の指導者の育成ではない、市井の人々の教育を標榜している。封建社会から資本主義社会に変わり、市井の人々の活躍の場は産業界になっていく。産業を支える企業社会、その中核となる大企業。一国の良心とも謂ふ可き人々が、大企業に入り国を作り上げていく。同志社大学が再生産の機能を維持しているならば、かつて「同やん」と呼ばれた育ちのいいぼんぼんを時代に合わせて再生産していると思われる。ある程度豊かな暮らしの家庭の子

女を大企業に送り込み、豊かな暮らしの次の世代に仕立て上げていく。大学の教育によって説明力が向上したことが、この再生産のサイクルにプラスの影響を与えている。このような姿が見える。大企業への就職という面から見ると、同志社大学の学生教育は成功していると言えるのではないかと思う。

参考文献

文部科学省「平成22年度国公立大学入学者選抜実施状況」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/_icsFiles/afieldfile/2010/10/01/1297952_1.pdf)

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄,1999,「分数ができない大学生」東洋経済新報社

「卓越する大学」,2011,大学通信

ピエール・ブルデュー&ジャン=クロード・パスロン,1997,「遺産相続者たち」石井洋二郎
監訳 藤原書店